

棗 遺 跡

NATUME

SITE

—民間開発・店舗建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査—

1 9 9 0

前橋市教育委員会

はじめに

歴史跡が所在する群馬県前橋市は、北に名山赤城山を望み坂東太郎として名高い利根川や市民の憩いの場となっている詩情豊かな広瀬川が市街地を流れる水と緑の美しい県都です。

このように豊かな自然に恵まれた市域には、今から2万年以上前の旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が地下に眠っています。特に古墳時代においては、上毛野氏の本拠地として市域には、その数八百数十基といわれる大小の古墳が造られ東国の中心として栄えました。

奈良・平安時代に至ると上野國は大国と称され国府が現在の元経寺町におかれ、上野國分寺・国分尼寺なども建立され、上野國の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

中世においては、戦乱にかかる城砦などの遺跡や信仰に関係する各種石造物などの遺物が数多く残されています。また、近世に至ると川越・忍とならび関東三名城の一つとして知られる厩橋城が築かれ、諸代大名の酒井氏が藩政を執り行いました。

このように、前橋の地は豊かな自然とともに長い歴史に培われて発展してきたのであります。

今後も各種開発事業に伴う発掘調査により、さらに本市の歴史の空白部分が解明されていくものと確信しております。

このたび、株式会社松清本店より店舗造成に伴う埋蔵文化財確認調査依頼があり、調査を実施しましたところ、小規模ではありますが古墳時代の集落跡が発見され、本調査をすることに至りました。本遺跡は、広瀬川低地帯にあり、旧利根川氾濫原域ということで遺跡の分布が非常に少ない地域となっておりますが、微高地上には集落が存在するということが分かり貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり物心両面から援助・協力をいただきました株式会社松清本店、また発掘作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が野中・上長磯地区の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考になれば幸いに存します。

平成3年2月1日

前橋市教育委員会
教育長岡本信正

柏原村出土文化財管理センター

目 次

はじめに	頁
I 調査に至る経緯	2
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の経過	3
IV 層序	3
V 遺構と遺物	4
VI まとめ	7

例 言

1. この報告書は、株式会社松浦本店が建設する店舗建設予定地における発掘調査に関するものである。
2. 調査は、前橋市教育委員会管理部文化財保護課埋蔵文化財係が担当し、遠藤和夫・新保一美が参加した。
3. 本書の作成は、遠藤和夫・新保一美が共同討議のうえ、執筆・編集にあたった。
4. 本遺跡の略称は、1F1である。
5. 遺構の略称は次のとおりである。
H……住居跡
6. 遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
遺構……全体図 1/1000 住居跡……1/60 遺物……1/3

I 調査に至る経緯

平成2年1月25日付けで前橋市野中町406-2番地の開発にかかる埋蔵文化財試掘調査依頼が株式会社松浦本店代表取締役・植木敏夫氏より提出され、同年2月6日に試掘調査が実施された。その結果、調査地のはば中央部より古墳時代後期のものと見られる竪穴式住居1軒が確認され、市教育委員会と事業者の間で遺跡の取扱いについて協議した結果、保存することは不可能ということになり、市教育委員会の直営により調査が実施されることに至った。

なお、遺跡の名称は、旧地籍の字名を採用し棗(なつめ)遺跡とした。

II 位置と環境

棗遺跡が所在する群馬県前橋市野中町406-2番地は、市街地から南東へ約5km離れた旧利根川の流路である広瀬川低地帯に位置している。

本遺跡周辺は、旧利根川の流域であったということから、近世以降の遺跡は別として、古代の遺跡が発見されることは希であると思われていた。しかし、近年各種開発事業が増大する中で当地域は全くの古代の遺跡の不毛地帯ではなく、微高地には遺跡が存在するということが明らかになってきた。青柳寄居遺跡(昭58・前橋市埋蔵文化財発掘調査団)茶木田遺跡(昭59・前橋市教育委員会)野中・天神遺跡(平1・群馬県埋蔵文化財調査事業団)伊勢遺跡(平2・前橋市埋蔵文化財発掘調査団)の調査などが代表的なものであるが、その外、片貝神社古墳や古地図に見られる集落(微高地に分布している)周辺では、土師器・須恵器などの遺物の分布も認められている。



試 塚 調 査



遺跡全体図 (1/1000)



遺跡位置図 (国土地理院 5万分の1 前橋)



遺跡周辺図 (1/5000)

III 調査の経過

本調査は、平成2年2月7日・8日の二日間にわたり実施された。

第一日（2月7日）晴れ

- ・住居跡全体が確認できるよう重機により遺構部分の拡張を行う。
- ・水準点の移動・遺跡地全体図の作成を行う。
- ・遺構確認面の精査を行う。
- ・住居跡の掘り下げを行う。

第二日（2月8日）晴れ

- ・昨日に引き続き住居跡の掘り下げを行う。
- ・遺物分布図を作成し、遺物を取り上げる。
- ・住居跡埋土の地層断面図を作成する。
- ・カマドの精査を行う。
- ・住居跡の全体図を作成する。
- ・遺跡の全景写真を撮り、全作業を終了する。



発堀調査が始まる



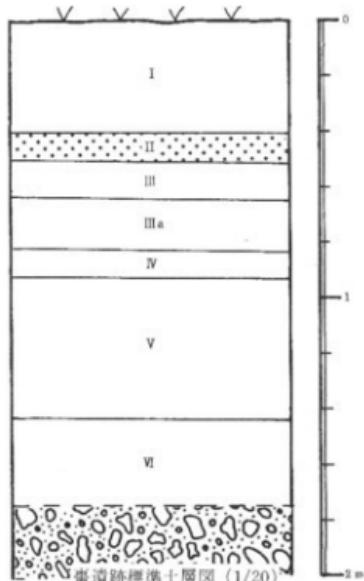
調査が終了する

IV 層序

I層	褐色粗砂層	B軽石を含む耕作土
II層	暗黄褐色細砂層	F P 5% 炭化物含む
III層	暗黄褐色微砂層	砂質ローム層
III _a 層	明黄褐色微砂層	砂質ローム層
IV層	軽石を多量に含む層	
V層	暗黄褐色の砂層	
VI層	暗灰白色の砂層	下部は砾層

地層確認のための深堀は、調査地の北・中・南の三か所に設定した。中央部にFPを多く含む遺物包含層が島状に確認されたが、その外の大部分は砂質の土壤を中心としている。

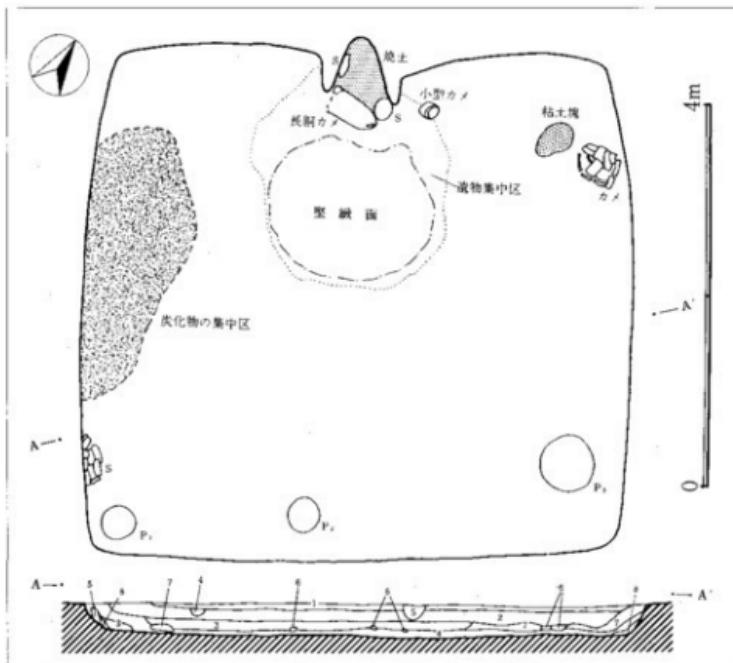
住居跡は、現地表面から40~50cmのII層より確認された。



V 遺構と遺物

1 遺構

開発予定地のほぼ中央部より確認された住居跡は、東西5.80m、南北5.40mのやや横長の方型を呈し、面積は約32m²で、主軸方位はN-32.5°-Wである。住居跡を埋めている土は、F Pを含む褐色砂質土である。灰白色の砂質土を床面としており、一部カマド前に粘土を敷き詰めた貼床状の堅緻面も確認された。なお、住居北西隅近くから白色粘土塊が検出されている。遺構確認面からの深さは、30~35cmである。カマドは、北壁のほぼ中央部にやや壁外に出る形で造られており、角閃石安山岩を右袖の補強石として使用している。また、左袖の補強材として転用されたものと思われる内部に土が充填された長胴ガメが左袖から焚口部分へ倒れた状態で確認されている。さらに西壁付近を中心として床面直上から広く炭化物が検出されており、焼失住居である可能性も高い。南壁に沿って2基の柱穴と見られるピットが、また、南東隅近くでは、径30cmほどの貯蔵穴と思われるピットも確認されている。



1層 茶褐色細砂層 F P 7% 3層 茶褐色細砂層 F P 3% 5層 黒褐色粗砂層 7層 炭化物混入層
2層 棕褐色粗砂層 F P 10% 4層 灰白色細砂層 6層 炭化物 8層 炭化物混入層

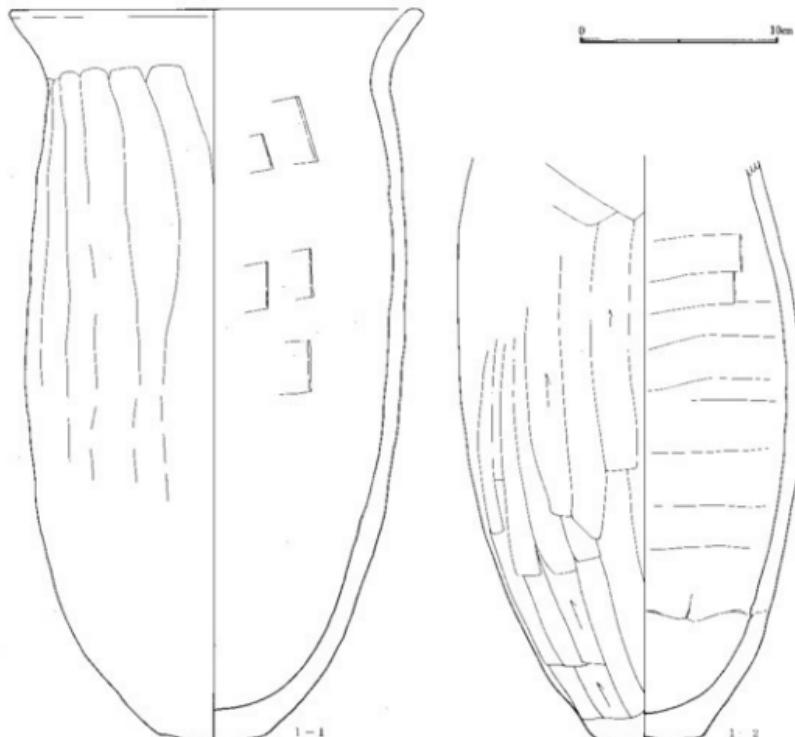
2 遺 物

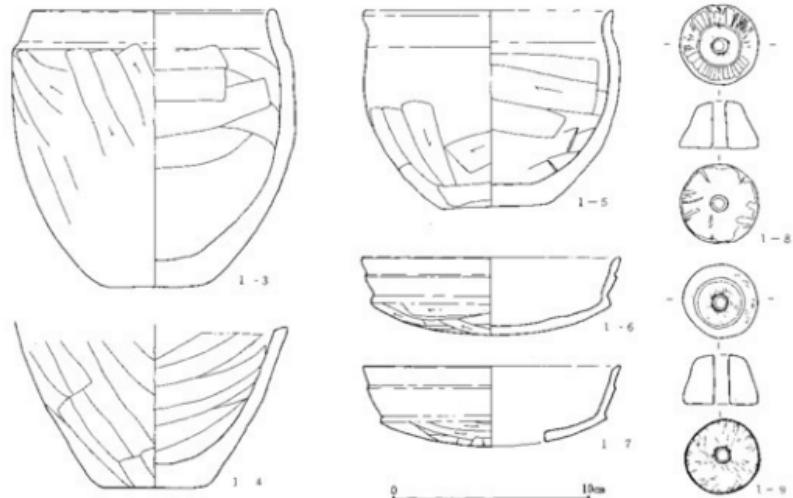
住居外の包含層から数点、住居内からコンテナパット1箱分の土器片が出土した。土器片は、總て上部器である。このうち図示出来るまで復元できたのは、長胴カメ2個体、カメ1個体、小梨カメ2個体、杯2個体である。小型カメ2個体の内1個体は、ほぼ完形で出土した。また、滑石製の紡錘車が2点、中央部と西壁近くの炭化物の中から発見された。

カマド付近から遺物の大部分が出土しており、そのほかからの出土はほとんど見られなかった。ほぼ完形に復元できた長胴カメは、カマド左袖から焚口部へ倒れた状態で発見されており、右袖に補強材としてフットポール型の自然石を使用していることや、カメの内部に土が充填されていたことなどから類推して、おそらく左袖の補強材として転用した物と思われる。

住居内南西部の西壁下から十点近くの橢円形の石が重なった状態で見つかっており、子持村黒井峯遺跡の調査事例にもある編物石ではないかと思われる。なお、カマド前の床面直上から炭化した編物状の敷物と思われる繊維が確認されている。

出土遺物の特徴から遺構は、古墳時代後期、鬼高田期の所産と推定される。





棗遺跡出土遺物(1/3)

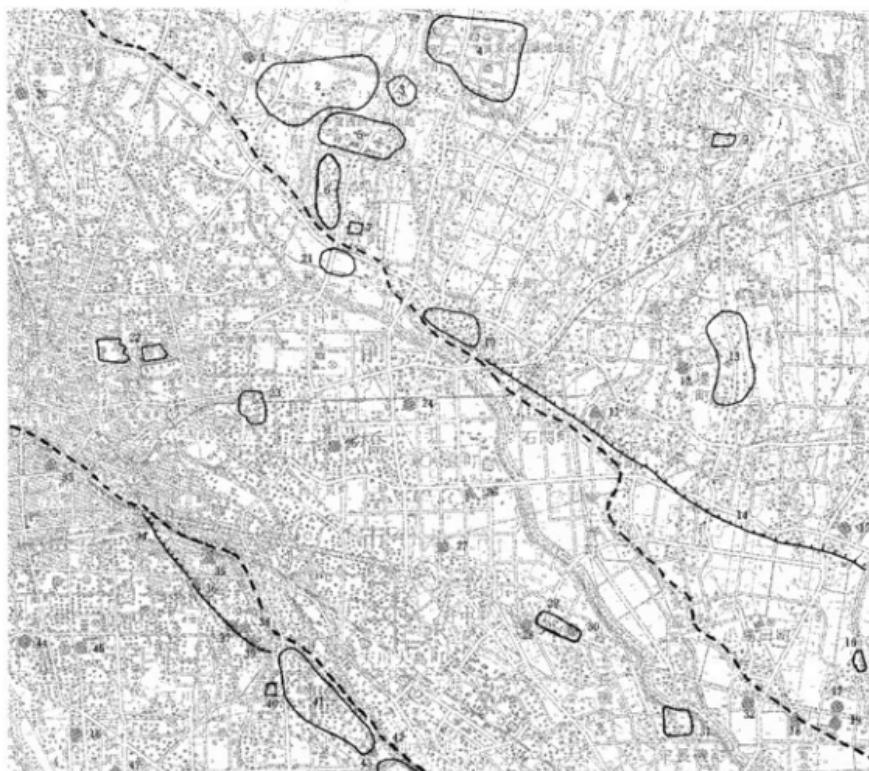
棗遺跡出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	法量		残存	胎土	色調	成・整形方法		備考
			口径	器高				口・胴部	底部	
1	1-1	長脚カメ	21.0	37.5	90%	密 石英	にぶい橙色	口縁部横ナデ 体部へラ削り	ヘラ調整	底盤から口縁にかけて 吸灰あり
2	1-2	長脚カメ	—	29.8	70%	密 黒雲母	黄褐色	体部へラ削り後 磨き整形	ヘラ削り	体部に二火焼成の 赤褐色部あり
3	1-3	小型カメ	12.4	14.2	90%	密 石英	明赤褐色	口縁部横ナデ 体部へラ削り	ヘラ調整	表面1/3 内面1/2の吸灰 あり、比重の高い胎土
4	1-4	長脚カメ	底部のみ	—	—	密 黒雲母	橙色	体部へラ削り後 磨き整形	ヘラ削り後 ヘラ焼き	
5	1-5	小型カメ	12.7	10.2	90%	密 石英	にぶい橙色	口縁部横ナデ 体部へラ削り後 磨き	ヘラ調整	底盤から口縁にかけて 表面の1/3程の吸灰あり
6	1-6	环	13.1	4.0	90%	密	橙色	体部横ナデ	ヘラ削り	二段の棱を有す 内面の胎膜は焼けている
7	1-7	环	13.0	4.1	40%	密	虹色	内面から体部にかけ て横ナデ	ヘラ削り	二段の棱を有す 赤色座彩
8	1-8	杓鍤車	4.0	2.5	完形	—	—	—	—	側面に調整痕あり 重さ50 g
9	1-9	杓鍤車	3.8	2.5	完形	—	—	—	—	重さ46 g

IV まとめ

かつて古代の遺跡は殆ど存在しないであろうと言われていた広瀬川低地帯域で、近年続々と遺跡が発見されている。青柳寄居遺跡、茶木田遺跡、伊勢遺跡、野中・天神遺跡などであるが、総

て奈良・平安時代以降の遺跡で、同地帯に存在する古墳を築造したであろう古墳時代の集落跡の調査は皆無であった。本遺跡の調査は、わずか一軒の住居跡の調査であったが、同地域の歴史を占墳時代まで遡らせるものとして貴重な発見となった。住居跡は、榛名山を給源とする轟石層FPを掘り込み、水成堆積した砂質土を床面として塗かれている。深掘による地層の堆積状況から考えて、FP以前の当地域は、利根川もしくは中小河川の氾濫域であった可能性が強く、この野中・上長瀬地区に限っては、5世紀以前に遡る遺構は無いものと思われる。このことから6世紀半ば以降、本地域に人々が居住しはじめたのではないかと推察できる。



- 赤城火山斜面 1 南田之口遺跡 2 小神明遺跡 3 烏取城跡 4 芳賀東部团地遺跡 5 芳賀西部团地遺跡 6 笠原遺跡群
 7 湿野屋敷 8 新田冢古墳 9 萩塙城跡 10 上泉城跡 11 伊丹寺古墳 12 沼西遺跡 13 香野团地遺跡 14 女堀
 15 富田遺跡群 16 今井城跡 17 今井・白山遺跡 18 五井・八日市遺跡 19 今井・白山遺跡
 広瀬川低地帯 20 青柳寄居遺跡 21 軽石礫地 22 清正寺の寄柄 23 三俣城跡 24 茶木川遺跡 25 片貝城跡 26 片貝神社
 古墳 27 野中綱塚跡 28 棚遺跡 29 野中・天神遺跡 30 伊勢遺跡 31 上長瀬城跡 32 日水田雜誌地
 前橋台地 33 八幡神社古墳 34 女溝 35 不二山古墳 36 カロウト山古墳 37 天川寄宿 38 前橋二子山古墳 39 二子山前
 遺跡 40 朝倉環濠跡 41 朝倉山城跡 42 八幡山古墳 43 法藏古墳群 44 生川遺跡 45 西天神遺跡 46 中大門
 遺跡 47 東京安寺遺跡



発堀調査の様子



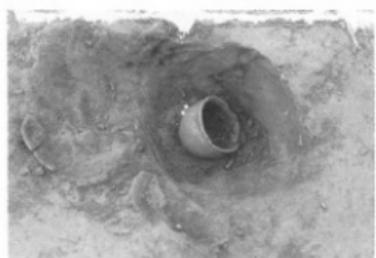
遺物の出土状況



土層断面



カマド付近の遺物



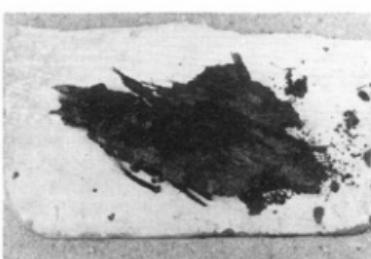
小型カメの出土



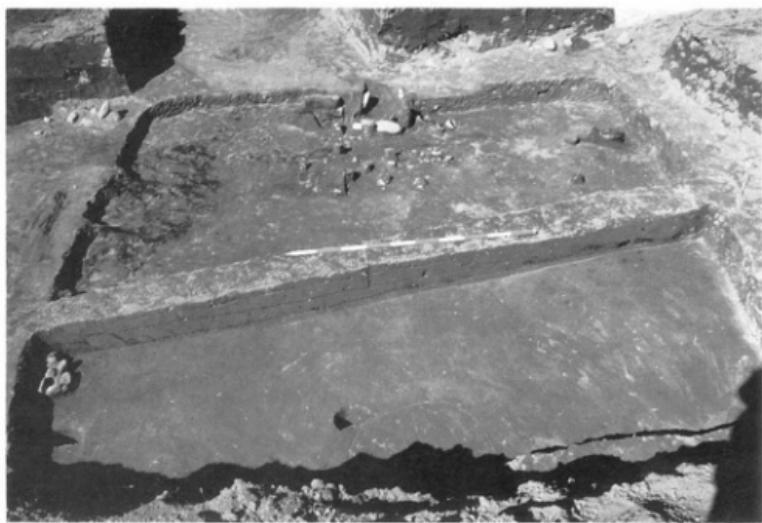
カマド全景



壁際に置かれていた石（編物石か？）



炭化状の繊維（敷物か？）



遺物・炭化物の出土状況



住居跡の全景



1 - 5



1 - 7



1 - 3



1 - 6



1 - 4



1 - 1



1 - 2



1 - 8



1 - 9

出 土 し た 土 器 と 石 製 品

調査要項

遺跡名称　棗遺跡（なつめいせき）
所在地　群馬県前橋市野中町406-2
遺跡記号　1F1
調査期日　試掘調査 平成2年2月6日
発掘調査 平成2年2月7～8日
調査面積　120m²（内本調査部分40m²）
開発面積　1996.60m²
調査原因　民間開発（店舗建設）
調査依頼者　植木敏夫（前橋市力九町900-1）
調査主体者　前橋市教育委員会 教育長 岡本 信正
事務局　前橋市教育委員会 管理部長 二瓶 益巳
文化財保護課 課長 福田 紀雄
埋蔵文化財係 係長 浜田 博一
調査担当者　埋蔵文化財係 主任 遠藤 和夫 嘴託員 新保 一美
調査参加者　飯島勝亥 石倉武雄 石倉 操 落合高男 小島勝雄 長岡徳治
調査協力　株式会社松浦本店 小林工業株式会社



棗遺跡（1F1）

印刷 平成3年2月1日
発行 平成3年2月20日

発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1
印刷所 上毎印刷株式会社 前橋市天川大島町305-1

